三、鄭玄の五行説

本節では、鄭玄の五行説について考察する(1)。鄭玄の著作は数多く、三礼の注が伝世する他、佚書の字句も諸書に引かれており、現在でもその思想を検討するための資料に事欠かない。そのため、その五行説についても、詳細に考察することができる。以下、五行に関する様々な説を分析し、鄭玄が五行について如何なる姿勢を採っていたかを分析する。

四霊

鄭玄の五行説の特徴は、経書・緯書に明証を求めることと謂える。たとえ当時の多くの学者達に受け入れられている説であっても、経書や緯書の記述にそぐわなければ従わない。この姿勢が最も顕著に表れているのが、四霊の配当である。

第一節で考察したように、漢代では「龍――東(木)、凰――南(火)、虎――西(金)、亀――北(水)」という四霊獣の説が有力で、許慎『五経異義』や修母致子説ではこれに基づいて「龍(木)・凰(火)・麟(土)・虎(金)・亀(水)」という五霊獣説が採られた。しかし、鄭玄はこのような配当を認めず、『駁五経異義』にて反駁を加えている。

> 古者聖賢言事亦有效、三者取象天地人、四者取象四時、五者取象五行。今云、麟鳳龜龍、謂之四靈。是則當四時明矣。虎不在靈中、空言西方虎者、麟中央得則無近誣乎。
>
> 古代の聖人賢者が何かを言う際には根拠がある。三であれば天地人に象り、四であれば四季に象り、五であれば五行に象る。『礼記』礼運では「麟・鳳・亀・龍を四霊と謂う」と言うのだから、四季に当たることは明確である。ここで虎が霊獣の中に挙げられていないのに、根拠も無く「西方は虎」と言うのだから、麟が中央であるというのは、ほとんどでたらめであることを免れない。

すなわち、礼運に「四霊」とある以上、これは四方に対応した言葉であり、「四霊」の一つである麟は四方のいずれか(鄭玄は西と考える(2))に配当されるべきであり、中央(土)に属するとは考えられないという。そして、虎を西(金)に配当する説を採らない(3)。

許慎や蔡邕が採った「龍(木)・凰(火)・麟(土)・虎(金)・亀(水)」という五霊獣説は経典に根拠が見出せない。経典に根拠が見出せない以上は、当時如何に有力視されていようと、従う必要は無い。つまり、『礼記』礼運の「麟鳳龜龍、謂之四靈」という経文を解釈する際には、この俗説に依拠しない。ここには、文献的根拠を重んじる鄭玄の姿勢が如実に現れている。

五常

緯書に依拠した例としては、五常の配当が挙げられる。

『漢書』の律暦志・天文志や『白虎通義』性情に見えるように、後漢期の学者達の多くは、「仁――木、礼――火、信――土、義――金、知――水」と、五常に五行を当てて考えていた(4)。第一節で考察した修母致子説も、またこの配当に基づいている。

一方、鄭玄は「仁――木、礼――火、知――土、義――金、信――水」、つまり信・知を入れ替えて考えた。『礼記』中庸の鄭注に、次のように言う。

木神則仁、金神則義、火神則禮、水神則信、土神則知。
木神は仁、金神は義、火神は礼、水神は信、土神は知である。

このような配当は、『周易乾鑿度』に見える。

孔子曰、八卦之序成立、則五氣變形。故人生而應八卦之體、得五氣以爲五常。仁義禮智信、是也。夫萬物始出於震。震、東方之卦也、陽氣始生、受形之道也。故東方爲仁。成於離。離、南方之卦也、陽得正於上、陰得正於下、尊卑之象定、禮之序也。故南方為禮。入於兌。兌、西方之卦也、陰用事、而萬物得其宜、義之理也。故西方為義。漸於坎。坎、北方之卦也、陰氣形、盛陰、陽氣含閉、信之類也。故北方爲信。夫四方之義、皆統於中央。故乾坤艮巽、位在四維、中央所以繩四方行也、智之決也。故中央為智。故道興於仁、立於禮、理於義、定於信、成於智。

孔子は次のように述べた。「八卦の順序が確立すれば、五気が形を変える。そのため人は生まれながらにして八卦の形体に応じ、五気を稟けて五常をなす。五常とは、仁・義・礼・智・信である。万物は震から出現する。震は、東方の卦であり、陽気が生じ始め、形体を持つようになるところである。そのために東方は仁なのである。離で成就する。離は、南方の卦であり、陽が上方で正位を得て、陰が下方で正位を得る。このように尊卑の象が定まるのであり、これは礼の秩序である。そのために南方は礼なのである。兌で伏し隠れる。兌は、西方の卦であり、陰によって物事が取り仕切られ、万物がその道理を受ける。これは義の理である。そのために西方は義なのである。坎で進む。坎は、北方の卦であり、陰気が現れ、陰が盛んになって陽気がその中に閉じ込められる。これは信の類である。そのために北方は信なのである。これら四方の義は、いずれも中央に統制される。そのために乾・坤・艮・巽は四維に配置され、中央が四方の道を制御する。これは智による判断である。そのために中央は智なのである。そして、道は仁から起こり、礼にて確立し、義で正され、信で定まり、智にて成就する」

つまり、鄭玄が、班固や蔡邕といった学者達とは異なる配当を唱えたのは、このような緯書の記述に依拠したためと考えられる(5)。「信――土、知――水」という配当が経書に見出されない以上、鄭玄としては旧説に従う必要は無いのである。それよりも、『周易乾鑿度』の明文と合致させる方が、重要だったのであろう(6)。

五畜

それでは、経書の間で異なる配当が見られる場合は、どのように考えるのであろうか。結論から言えば、鄭玄は『周礼』の配当を重んじ、他の経典に見える配当については、うまくこじつけて『周礼』の配当に接近させるか、あるいは矛盾が生じないように処理している。以下、五畜の配当を例に、このことを考察する。

『周礼』は、いけにえの家畜を管理する官として、地官の牛人・春官の鷄人・夏官の羊人・秋官の犬人を設けている。冬官は欠如しているが、いけにえに用いる家畜として残っているのは豚であるから、「豕人」のような官が設けられていたと推定される。これらを五行に当てはめれば、「鷄――木、羊――火、牛――土、犬――金、豕――水」となる。

一方、『礼記』月令は、「(孟春之月)食麥與羊」、「(孟夏之月)食菽與雞」、

「（中央土）食稷與牛」、「（孟秋之月）食麻與犬」、「（孟冬之月）食黍與彘」と述べ、「羊――春（木）、鶏――夏（火）」という組み合わせとなっている。これは右に示した『周礼』の配当に合致しない。

この両者の矛盾について、鄭玄は如何に考えたのか。月令に対する鄭注に、『周礼』への合致を優先する鄭玄の姿勢がよく現れている。

麥、實有孚甲、屬木。羊、火畜也。時尚寒、食之以安性也。

麦は、種に殻があり、木に属す。羊は、火に当たる家畜である。春はまだ寒く、これらを食するのは養生のためである。

菽、實孚甲堅合、屬水。雞、木畜。時熱、食之亦以安性也。

豆は、実が堅い殻に包まれており、水に属す。鶏は、木に当たる家畜である。夏は熱く、これらを食するのはまた養生のためである。

稷、五穀之長。牛、土畜也。

アワは、五穀の長である。牛は、土に当たる家畜である。

麻、実有文理、屬金。犬、金畜也。

麻は、実に模様があり、金に属す。犬は、金に当たる家畜である。

黍、秀舒散、屬火。寒時、食之亦以安性也。彘、水畜也。

黍は、穂がバラけており、火に属す。寒い時節であり、これらを食するのはまた養生のためである。豚は、水に当たる家畜である。

ここでは、前節で論じた通り、春に羊（火）を食べること、夏に鶏（木）を食べることを、それぞれ「時尚寒、食之以安性也」「時熱、食之亦以安性也」と解釈して、うまく符合させようと試みている。月令の配当に従って「羊――木、鶏――火」とすれば話は簡単なのだが、そのようにはしない。『周礼』による配当を優先するためである。

鄭玄は、『洪範五行伝』への注でも、また『周礼』型の「鶏――木、羊――火、牛――土、犬――金、豕――水」という配当を採る。

雞、畜之有冠翼者也、屬貌。

鶏は、とさかや翼のある家畜である。五事では貌に属す。（7）

犬、畜之以口吠守者、屬言。

犬は、口で吠えて番をする家畜である。五事では言に属す。（8）

羊、畜之遠視者也、屬視。

羊は、遠くまで見ることができる家畜であり、五事では視に属す。（9）

豕、畜之居閑衛而聽者也、屬聽。

豚は、囲いの中に居て、人の言うことをよく聴く家畜である。五事では聴に属す。（10）

地、厚德載物。牛、畜之任重者、屬思。

地は、「厚い徳によって物を載せる」と言う（『周易』坤 象伝）。牛は、重い荷物を背負う家畜である。五事では思に属す。（11）

そして、『周礼』天官 包人「凡用禽獻、春行羔豚膳膏香、夏行腒鱐膳膏臊、

秋行犢麛膳膏腥、冬行鱻羽膳膏羶」に対する注では、まさしく『周礼』の地官牛人・春官鷄人・夏官羊人・秋官犬人に基づいて、五畜を五行に配当する考えを明らかにしている。

膏腥、雞膏也。羔・豚、物生而肥。犢與麛、物成而充。腒・鱐、暵熱而乾。魚・鴈、水涸而性定。此八物者、得四時之氣尤盛、爲人食之弗勝。是以用休廢之脂膏煎和膳之。牛、屬司徒、土也。雞、屬宗伯、木也。犬、屬司寇、金也。羊、屬司馬、火也。

「膏腥」とは、鷄の脂である。仔羊と豚は、生まれながらに肥えたものである。仔牛と仔鹿は、成長して充実するものである。干し肉と干し魚は、熱で乾かして干したものである。魚と雁は、水が枯れてその特性が定まるものである。これら八種の物は、特に盛んな四時の気を得ており、そのままでは人間が食べるに耐えない。そこで、休廃の脂膏を用いて調理し、調和させて食べるのである。牛は、司徒に属し、土に当たる。鷄は、宗伯に属し、木に当たる。犬は、司寇に属し、金に当たる。羊は、司馬に属し、火に当たる。

ここでは、『周礼』に於いて牛人が地官大司徒に、鷄人が春官大宗伯に、羊人が夏官大司馬に、犬人が秋官大司寇の下に属していることを根拠として、「牛――土」「鷄――木」「犬――金」「羊――火」であると明言する(12)。

ところで、『周易』説卦伝には、「兌爲羊」という文言がある。鄭玄は、これについてどのように説明したのであろうか。兌は西方金に配当される卦であり、これに従えば羊も金に配当しなければならず、『周礼』や月令に対する注と齟齬を来たす。この「兌爲羊」について、鄭玄は次のように言う。

其畜好剛鹵。

羊という家畜は、固くて塩気の強い地を好む。(13)

『説文解字』巻十二上 鹵が「鹵、西方鹹地也」というように、鹵は西方と結び付けてイメージされる土地である。鄭玄の理屈によれば、羊がこのような土地を好むから、西方兌と結び付くのであり、羊自体が金に属すかどうかについては述べない。述べないことによって、他の箇所で羊を火に属す家畜として論じていることとの矛盾を、避けているのであろう。

以上の通り、五畜について、鄭玄は『周礼』の配当に従っている。『周礼』及び『洪範五行伝』は配当が合致し、問題なく解釈ができたが、月令と『周易』については、やや苦しい説明を加えたり、歯切れの悪い説明に留めたりしている。

五穀

鄭玄は、五穀についても、同様に、『周礼』の記述に基づくために、月令に対してややこしい注解を施している。以下、このことについて示す。

『礼記』月令の鄭注では、五穀についても月令本来の配当に従わず、「麦――木、黍――火、麻――金、菽――水」とした上で、夏に鷄・菽を食べることを「時熱、食之亦以安性也」とする等、何とか付会して説明しようとしている。とりわけ、冬に食べる黍を火に配当したために「寒時、食之亦以安性也」という説明が必要となり、それによって却って、冬に豚肉(水に配当される)を食べることと論理が衝突し、自己撞着を引き起こしてしまっている(鄭注の文面は前頁を参照)。これもまた、『周礼』の文を優先したためと考えられる。

『周礼』天官 食医に、以下のようにある。

凡會膳食之宜、牛宜稌、羊宜黍、豕宜稷、犬宜粱、鴈宜麥、魚宜苽。

膳食の適切な組み合わせは、牛には米、羊には黍、豚には稷、犬には粱、鴈には麦、魚には苽が相応しい。

ここには「羊宜黍」という句が見える。前述の通り、鄭玄は羊を火に配当するので、ここで羊と組になっている黍も、火に属することになる。つまり、この『周礼』食医の文によって黍が火に配当されるために、月令注でも「秀舒散、屬火」と述べ、黍が火に属すという説を採ったのである。

五虫

五畜・五穀については、月令の配当に従わず『周礼』の記述に基づいて説明を行なった。そもそも、鄭玄は月令を周公の作とは認めておらず(14)、そのために月令を『周礼』より一段下の文献と考えたのであろう。しかし、『周礼』とうまく符合すれば、月令による配当に従う場合もあった。

左は、月令の五虫（「(孟春之月) 其蟲鱗」・「(孟夏之月) 其蟲羽」・「(中央土) 其蟲倮」・「(孟秋之月) 其蟲毛」・「(孟冬之月) 其蟲介」）に対する鄭注である。

象物孚甲將解。鱗、龍蛇之屬。

殻が解けようとしている物に象る。鱗虫とは、龍蛇の類である。

象物從風鼓葉。飛鳥之屬。

風によって舞い起こされる物に象る。飛鳥の類である。

象物露見不隱藏。虎豹之屬、恒淺毛。

顕れていて、隠れていない物に象る。虎・豹の類で、常に毛が浅い。

象物應涼氣而備寒。狐貉之屬、生旃毛也。

涼気に応じて寒さに備える物に象る。狐・貉の類で、厚い毛を持つ。

介、甲也。象物閉藏地中。龜鼈之屬。

介とは甲羅のことである。地中に隠れる物に象る。亀・鼈の類である。

これは五畜・五穀の場合と異なり、月令による配当に従っている。

なお、中央土に属する「倮蟲」の具体的な例に「恒淺毛」という「虎豹之屬」を当てることは、虎を西方金に当てない鄭玄の考え方（前述）が反映されている(15)。

動物を「鱗・羽・倮・毛・介」の五虫に区分する分類は、『周礼』地官 大司徒に見える。その土会の法（土地ごとの貢税を定める法）に、次のようにある。

以土會之灋、辨五地之物生。一曰山林、其動物宜毛物、其植物宜旱物、其民毛而方。二曰川澤、其動物宜鱗物、其植物宜膏物、其民黑而津。三曰丘陵、其動物宜羽物、其植物宜覈物、其民專而長。四曰墳衍、其動物宜介物、其植物宜莢物、其民皙而瘠。五曰原隰、其動物宜臝物、其植物宜叢物、其民豐肉而庳。

土会の法によって、五種の土地の産物を弁別する。第一は山林である。動物は毛の多いもの、植物は草が良く、人々は毛深く四角い。第二は河川である。動物は鱗の有るもの、植物は油分の多いものが良く、人々は黒く潤っている。第三は丘陵である。動物は羽の有るもの、植物は固い種の有るものが良く、人々は細長い。第四は水際や低地である。動物は甲羅のあるもの、植物は莢のあるものが良く、人々は白くて痩せている。第五は湿原である。動物は毛の無いもの、植物は繁茂するものが良く、人々は肉付きが良く背が低い。

鄭注では、この五地（山林・川沢・丘陵・墳衍・原湿）を五行に分類してはいないが(16)、毛物・鱗物・羽物・介物・贏物のそれぞれについて、月令注と同様の説明を施しており、やはり解釈は一貫している。

毛物、貂狐貒貉之屬、縟毛者也。鱗物、魚龍之屬、津潤也。羽物、翟雉之屬。核物、李梅之屬、專圜也。介物、龜鼈之屬、水居陸生者。莢物、薺莢王棘之屬。皙、白也。瘠、臞也。贏物、虎豹貔雷之屬、淺毛者。叢物萑葦之屬。

毛物とは、ムジナ・狐・テン・アナグマといった類で、毛深いものである。鱗物とは魚・龍の類で、潤っている。羽物とは雉の類である。核物とは、李や梅の類で、楕円である。介物とは亀・鼈の類で、陸で生まれて水中にいるものである。莢物とは、覆いや莢・棘の有るものである。皙は、白いこと。瘠は、やせていること。贏物とは、虎や豹の類で、毛の薄いものである。叢物とは、シソや葦の類である。

また、考工記 梓人の「天下之大獸、五。脂者、膏者、贏者、羽者、鱗者」に対しても、次のように注釈する。

脂、牛羊屬。膏、豕屬。贏者、謂虎豹貔螭、為獸淺毛者之屬。羽、鳥屬。鱗、龍蛇之屬。

「脂」とは、牛・羊の類である。「膏」とは、豕の類である。「贏」とは、虎・豹・貔・螭で、毛の浅い獣の類である。「羽」とは、鳥の類である。「鱗」とは、龍・蛇の類である。

ここでは鱗・羽・贏の三者が月令・大司徒と共通しており、この三者については月令・大司徒と同様の注を施している。

これらのことから、鄭玄の五虫・四霊の説は、次のように整理できる。

五行	虫	詳細	四霊
木	鱗	龍蛇之属	龍
火	羽	飛鳥之属	鳳
土	倮	虎豹之属	（無）
金	毛	狐貉之属	麟
水	介	亀鼈之属	亀

一方、『洪範五行伝』にも「贏虫之孽」「介虫之孽」といった語が見られ、それぞれ視之不明（火の不調）・言之不従（金の不調）に対応するとされる。つまり、月令とは配当が異なる。これについて、鄭玄は辻褄を合わせるために特殊な注を施している。以下、『洪範五行伝』の「（貌之不恭）時則有龜孽」「（視之不明）時則有贏蟲之孽」「（思心不容）時則有華孽」「（言之不從）時則有介蟲之孽」「（聽之不聰）時則有魚孽」への注を順に示す。

龜、蟲之生於水而游於春者。屬木。

亀は、水に生まれて春に動き回る動物である。五行では木に属す。（17）

蠃、螟蟲之類、蟲之生於火而藏於秋者也。

蠃は、ズイムシの類である。火に生まれて秋に隠れる動物である。（18）

華、當爲夸。夸蚓、蟲之生於土而遊於土者。

「華」は、「夸」とすべきである。ミミズであり、土に生まれて土の中で動き回る動物である。（19）

蝝螽蜩蟬之類、生於火而藏於秋者也、屬金。

蝗や蝉の類である。火に生まれて秋に地中に隠れる動物である。五行では金に属す。（20）

魚、蟲之生水而游於水者也。

魚は、水に生まれて水の中で動き回る動物である。（21）

蠃虫（倮虫）・介虫について、月令や大司徒・梓人の注ではそれぞれ「虎豹之屬」「龜鼈之屬」としている一方で、この『洪範五行伝』に対する注では「螟蟲之類」「蝝螽蜩蟬之類」、つまり虫のこととしている。このように月令や大司徒の倮虫・介虫とは別のものと見なすことによって、配当の矛盾を避けているのである。

また、月令等の注で介虫に当たると見なしている亀について、この『洪範五行伝』の注では「蟲之生於水而游於春者」と述べることにより、水にも木にも属するというような説明を施している。このように、亀が水にも属し得るという余地を残すことによって、破綻を避けている。

鄭玄は『洪範五行伝』に対して、『劉歆伝』のように文面を書き換えることはしなかったが、うまく解釈を施すことによって、『周礼』との矛盾を回避し、全体の辻褄を合わせるという態度を採ったのである。

六天と六方

鄭玄のよく知られている学説の一つに、六天説というものがある。これは天の神を天皇大帝・靈威仰・赤熛怒・含枢紐・白招拒・汁光紀の六者と見なし、天皇大帝と後五者に対して別々の祭祀を設けるという説である。これは「一――五（木・火・土・金・水）」という構図であり、一見、整然とした構造を有しているようだが、実際には複雑である。以下、このことについて考察する。

六天説の内容については、『春秋左伝正義』桓公五年 疏が詳しく説明している。

鄭玄注書、多用讖緯、言、天神有六、地祇有二。天有天皇大帝、又有五方之帝。地有崐崘之山神、又有神州之神。大司樂、冬至祭於圜丘者、祭天皇大帝、北辰之星也。月令、四時迎氣於四郊、所祭者祭五德之帝、大微宮中五帝坐星也。春秋緯文耀鉤云、大微宮有五帝坐星、蒼帝其名曰靈威仰、赤帝曰赤熛怒、黄帝曰含樞紐、白帝曰白招拒、黒帝曰汁光紀。五德之帝謂此也。其夏正郊天、祭其所感之帝焉。周人木德、祭靈威仰也。曾無冬至之祭、唯祭靈威仰耳。唯鄭玄立此為義。

鄭玄の『尚書』注では讖緯の説を多用しており、次のように言う。「天

の神には六つ、地祇には二つがある。天には天皇大帝と、五方の帝がいる。地には崐崘山の神と、神州の神がいる。『周礼』大司楽の『冬至に圜丘にて祭る』とあるのは、天皇大帝を祭るのであり、これは北辰の星である。月令の、四季に四郊で各季節の気を迎えるというのは、そこで祭られるのは五徳の帝であり、大微宮の中の五帝坐の星である」『春秋緯文耀鉤』に、「大微宮には五帝坐の星があり、蒼帝はその名を靈威仰といい、赤帝は赤熛怒といい、黄帝は含枢帝といい、白帝は白招拒といい、黒帝は汁光紀という」とある。鄭玄の言う「五徳の帝」とは、このことである。夏正に天を郊すのは、（五徳の帝のうち）始祖を感生させた帝を祭るのである。周人は木徳であるので、靈威仰を祭る。かつては冬至の圜丘の祭は無く、靈威仰を祭るのみであった。鄭玄だけが、この祭祀を立てるべきとした。

これによれば、天には天皇大帝(22)と五帝があり、前者は冬至に円丘で祭る北辰の神、後者は季節ごとに郊で祭る五徳の神であると言う。また、五帝については、『周礼』春官 小宗伯「兆五帝於四郊」の注釈で、次のように言う。

五帝。蒼曰靈威仰、大昊食焉。赤曰赤熛怒、炎帝食焉。黄曰含樞紐、黄帝食焉。白曰白招拒、少昊食焉。黒曰汁光紀、顓頊食焉。

五帝とは、以下の通りである。蒼徳の帝を靈威仰と言い、大昊を配食する。赤徳の帝を赤熛怒と言い、炎帝を配食する。黄徳の帝を含枢紐と言い、黄帝を配食する。白徳の帝を白招拒と言い、少昊を配食する。黒徳の帝を汁光紀と言い、顓頊を配食する。

この五帝の内訳は『左伝正義』の引く『春秋文耀鉤』と全く同じであり、つまり緯書の説を用いている。

鄭玄が六天説を唱えた理由については、池田秀三氏が「冬至の『圜丘』祀天と夏正郊祀とを両立させようとすること」と論じている(23)。これが妥当であろう。

具体的には、『周礼』春官 大司楽に「冬日至、於地上之圜丘奏之。若樂六變、則天神皆降、可得而禮矣」とある一方で、『周易乾鑿度』には「三王之郊、一用夏正」とあり、両者は共に天の神を祀る儀式でありながら(24)、その時期は冬至と夏正とで異なる。そこで、鄭玄は圜丘での儀式を昊天上帝の祭祀と見なし(25)、夏正の郊祭を「受命之帝」を祀る儀式と考え(25)、両者を別の神を祀るものと考えることによって、矛盾を回避したのである。

そして、この「受命之帝」とは、具体的には各王者の始祖を感生させる五帝であると説明される。『礼記』大伝の鄭注に、次のように言う。

大祭其先祖所由生謂郊、祀天也。王者之先祖、皆感大微五帝之精以生。蒼則靈威仰、赤則赤熛怒、黄則含樞紐、白則白招拒、黒則汁光紀。皆用正歳之正月、郊祭之。

それぞれの先祖を生み出したものを大々的に祭ることを郊と言い、これは天を祀るのである。王者の始祖は、いずれも大微五帝の精に感応して生まれた。蒼徳は靈威仰に感応し、赤徳は赤熛怒に感応し、黄徳は含枢紐に感応し、白徳は白招拒に感応し、黒徳は汁光紀に感応する。いずれも夏暦の正月に、これらを郊祭する。

そして、『礼記』月令の「（立春之日）迎春於東郊」「（立夏之日）迎夏於南郊」

等々には、それぞれ「迎春、祭倉帝靈威仰於東郊之兆也」「迎夏、祭赤帝赤熛怒於南郊之兆也」等と注釈し、夏正の郊祭の他に別途、迎気の祭りでそれぞれの方位に当たる帝を祭ると述べることによって、小宗伯の「兆五帝於四郊」とも折り合いをつけている。

このように、鄭玄は、冬至の圜丘祀天と夏正郊祀という、日付の異なる天への祭りを矛盾無く説明するために、天に於いて天皇大帝と五帝という六帝を設けた。

そして、五帝は天の祭祀のみならず、方位・季節といった地上の事柄にも関連付けられている。このために、鄭玄の方位に関する説は、やや入り組んだ内容となり、時にはバランスの悪い説明をすることもあった。

『周礼』春官 大宗伯には、玉器によって天地四方に礼する祭祀が述べられている。以下、その経文と鄭玄注を示す。

以玉作六器、以禮天地四方。以蒼璧禮天、以黄琮禮地、以青圭禮東方、以赤璋禮南方、以白琥禮西方、以玄璜禮北方。

玉を用いて六種類の祭具を作り、それによって天地四方に対して礼を行なう。蒼璧を用いて天に礼を行い、黄琮を用いて地に礼を行い、青圭を用いて東方に礼を行い、赤璋を用いて南方に礼を行い、白琥を用いて西方に礼を行い、玄璜を用いて北方に礼を行う。

此禮天以冬至、謂天皇大帝在北極者也。禮地以夏至、謂神在崐崘者也。禮東方以立春、謂蒼精之帝而太昊句芒食焉。禮南方以立夏、謂赤精之帝而炎帝祝融食焉。禮西方以立秋、謂白精之帝而少昊蓐收食焉。禮北方以立冬、謂黑精之帝而顓頊玄冥食焉。禮神者、必象其類。璧圜象天、琮八方象地、圭鋭象春物初生、半圭曰璋、象夏物半死、琥猛象秋嚴、半璧曰璜、象冬閉藏地上無物唯天半見。

ここで天に対して礼を行なうのは冬至であり、これは天の北極にいる天皇大帝であることを意味している。地に対して礼を行なうのは夏至であり、これは崐崘にいる神であることを意味している。東方に対して礼を行なうのは立春であり、これは蒼精の帝であり太昊・句芒を配食することを意味している。南方に対して礼を行なうのは立夏であり、これは赤精の帝であり炎帝・祝融を配食することを意味している。西方に対して礼を行なうのは立秋であり、これは白精の帝であり少昊・蓐収を配食することを意味している。北方に対して礼を行なうのは立冬であり、これは黒精の帝であり顓頊・玄冥を配食することを意味している。神に対して礼を行なう場合、必ずそれと同類のものに象る。璧は円形で天を象る。琮は八角形で地を象る。圭は先が尖っており、春に物が生じ始めることを象る。圭を半分にしたものをを璋と言い、夏に物が半ば死ぬことを象る。琥は猛獣の形をしており、秋の気候が厳しいことを象る。璧を半分にしたものを璜と言い、冬に物がしまいこまれて地上になくなり、天だけが半分見えていることを象る。

鄭玄は、蒼璧を以って「天」を祭る儀式を、冬至の天皇大帝の祭祀、つまり圜丘祀天と見なす。また、黄琮を以って「地」を祭る儀式は、夏至の崐崘の祭祀、すなわち方丘祀地と見なす(27)。そして、四方については、四立の迎気と見なし、五帝のうちの四帝（蒼精之帝・赤精之帝・白精之帝・黒精之帝）が祭られると考えた。

ここで、五帝のうちの四帝が挙げられているのにも拘らず、残る黄精之帝（含枢紐）については言及しない。何故なら、地については方丘祀地という、

圜丘祀天に匹敵する大祭が当てられており、含枢紐の入り込む余地が無いのである。そもそも含枢紐は天の神であり、地祇ではないのだから、経文に「禮地」とある以上、ここに入れることはできない。

それならば四方についても、天の太微の四帝を当てない方が、含枢紐のみを欠落させるよりもバランスが良い。経文で四方については「天」とも「郊」とも書かれていないのだから、霊威仰や赤熛怒等を当てる必要は無いはずである。しかし、四人帝（太昊・炎帝・少昊・顓頊）と四人神（句芒・祝融・蓐收・玄冥）のみを祭ることにすると、天地の天皇大帝・崑崙に対して釣り合わない。そこで、太微帝を祀って人帝・人神を配食するという形にして神明の格を合わせたために、結果的に含枢紐が余ってしまったのであろう(28)。論理としては破綻を免れているが、構図のバランスは悪い。

鄭玄は、経書・緯書の字句に依拠して、独自の五行説を展開した。その際には特に『周礼』に見える配当を重んじ、しばしば『周礼』を中心として様々な経典に見える記述を相互に結び付け、解釈を施した。

経典ごとに相異なる配当に対しても巧みに対処し、相互の矛盾や論理の破綻を避けているが、やや苦しい処置も目立つ。「介虫」に対しては大司徒・月令の注と『洪範五行伝』の注とで解釈を別にし、また月令注で冬に黍（火に当たる）を食べることについて「寒時、食之亦以安性也」と述べ、豚（水に当たる）を食べることには目をつぶっている。

また、六天説では、天の神について「一（天皇大帝）――五（太微五帝）」という構図を設けながら、五帝を地上の方位にも対応させたために、説明が込み入り、かつバランスの悪い構造となっている。これに較べると、劉歆の「一――三・五」モデルの方が、構造は遥かに整然としている。